

第6回

美術館

～美術館という名の遊び場～

美術教育監修・執筆

上野行一

美術館に対するイメージは人さまざま。話題の企画展での混雑や行列をイメージする人もいれば、閑散や静謐をイメージする人もいるだろう。大都市と地方では存在意義も違って来るし、目的やニーズも美術館によって異なる。美術館とはどのような場所として存在しているのだろうか。今回は、新しい美術館コンセプトを知る、美術館の役割に対する認識の変化、鑑賞に対する心構えについて学ぶ。

学習前
チェック!

身近な美術館のホームページをチェックしてみよう。目的や基本的な考え方を調べ、どのような作品を収蔵していて、それを市民のためにどんな方法で提供しているかを調べよう。

新しい美術館コンセプト

美術館はそれぞれが多様なコンセプトと役割をもっている。創設の背景やニーズが異なるため、一概に新しい美術館コンセプトを語ることはできないが、番組で紹介したような地域の産業や地理的文化的資源と結びつき、街の一部として機能するという地域密着型のコンセプトは、比較的よく見受けられる。

かつての美術館は教養娯楽の場でもなく、もちろん教育の場でもなく、一部の専門家と愛好家の閉ざされた場所という性格が強かった。

およそ20年前、ミュージアムの教育的目的を冒頭に掲げた「デヴィッド・アンダーソン報告」*が世界の博物館・美術館に衝撃を与えて以来、日本の博物館・美術館も大きく変容してきたが、コンセプトをいかに実体化するかが今後の課題である。

*：報告の詳細は、『ミュージアム国富論』

著：塚原正彦 + デヴィッド・アンダーソン、訳：土井利彦に詳しい。

美術館の役割

日本の社会では長い間、美術館の役割が「収集・保管・研究・展示」という美術館内部での仕事に焦点化されて認識されてきた。これらは、美術作品という「もの」を扱う視点から見た役割といえる。一方近年は、教育・普及や地域貢献が美術館の役割として注目されている。

これらは、いわば「ひと」に対して何ができるかという視点から見た役割といえる。ただし、日本における明治期の美術館創設とほぼ同時期に、米国では地域の社会教育施設としてメトロポリタン美術館等が創設されたように、教育・普及や地域貢献は新しい役割というよりも、美術館の基本的な役割という性格をもっていることを押さえておきたい。社会的存在としての美術館の役割を考えることが今回のポイントだ。



鑑賞する

美術館に行くことは好きだけど、鑑賞のしかたには自信がない。音声ガイドを聞いたり、解説を読んだりしてナルホドと思えば、それで鑑賞したことになるのだろうか。美術館に限ったことではないが、作品を鑑賞するには、解説を聞く前にまず自分の目でじっくりと観察して作品の描写や造形の妙を味わうことが大切だ。しかし、そこで留まってはもったいない。

作品の描写や造形をもとに情景やドラマを想像してみたり、人物が描かれていればその人の気持ちを想像してみたりして、自分の立場から作品の意味を考えると鑑賞の醍醐味^{たいごみ}と言える。鑑賞という体験は本来、作品に関する情報収集ではなく、作品と自分との間に生まれる個人的なことなのだから。

